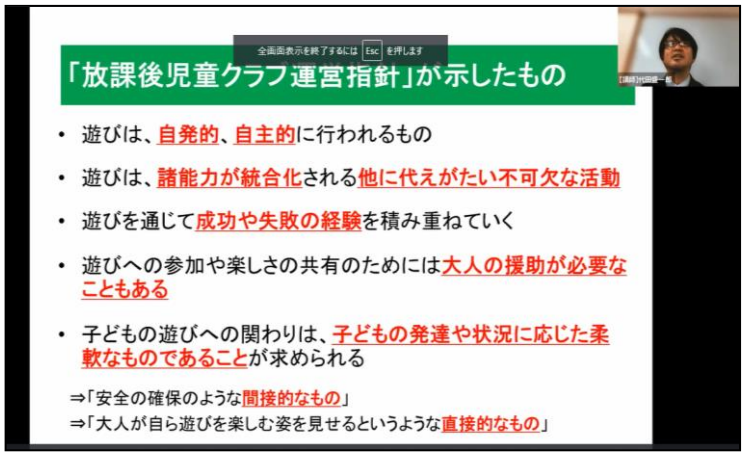
遊びが育む心の力

第52回岩手県学童保育研究集会

第52回岩手県学童保育研究集会は11月28日にオンラインで開催されました。昨年の研究集会はコロナウイルスの拡大で中止になり、2年ぶりの開催となりました。岩手県内の学童保育の保護者、指導員ら282人が参加。午前は全体講演、午後は保護者会やほいく誌などをテーマにした5分科会が開かれました。

集会の冒頭に岩手県学童保育連絡協議会の門田弘之事務局長が基調報告を行いました。門田事務局長はコロナウイルス禍で指導員も子どもたちも戸惑い、ストレスを抱えながら日々を過ごしていること、県内では依然として施設設備の不十分さ、児童の過密化、指導員不足などの現状があることを報告。「この研究集会で学習、情報共有しながら、より良い学童保育づくりの糧にしていきましょう」と呼びかけました。



運営指針を解説する代田盛一郎大阪健康福祉短期大学教授

続いて、代田盛一郎大阪健康福祉短期大学教授が「今、大切にしたい子どもの遊び～遊びが育むものへのまなざし～」と題して講演を行いました。

代田教授は、コロナ禍で子どもの遊びに対する価値観や意識が問い直されていると指摘。「遊びが制限されている今だからこそ、遊びの大切さを言語化し、社会に発信していくことが大事だ」と述べました。

国が定めた放課後児童クラブ運営指針の中では、遊びについて「諸能力が統合化される、他に代えがたい不可欠な活動」、「遊びを通じて成功や失敗の経験を積み重ねていく」などと示していることを紹介。児童期の発達の特徴を挙げながら、遊びがもたらす子どもの心や身体の成長について解説しました。

その上で、「遊びの中で成功や失敗を繰り返し、実体験として学んでいくことが大切。実体験が伴わないと、自分の思いと現実との間にそごが生じてしまう」と指摘。「現代は非常にストレスの多い世の中。生きていく中で、心が折れたり、切れてしまうことは誰にでもある。困難や喪失感にぶち当たった時に、もう一度前に進もうとする心の力（レジリエンス）の出発点は子どもの頃の遊びの中にあるのではないか」と示唆しました。【分科会レポートは2面に】

学童と私

岩手県連協　会長

千田　広幸さん

我が家の3人の娘は滝沢市の篠木なかよしクラブの出身です。三女が2年生の時、玉突き人事でクラブの父母会長になりました。当時は父母会長が滝沢村連協の役員を兼ねており、村連協役員として県連協の役員もすることになりました。

2010年に三女は卒所し、自分もOBになりましたが、その年の県連協総会で前任の会長が辞任することになり、県連会長を引き受けることに。当時は県連協も大変な時期で、断るという選択肢はありませんでした。

その翌年に東日本大震災が発生。それからの10年は県連協として何ができるのか模索しながら活動してきました。中でも14年に開催した第49回全国学童保育研究集会in岩手は大きな挑戦でした。全国の学童保育関係者4000人が岩手を訪れ、交流したことは、その後の岩手県の学童保育を大きく変えたと思います。

県連の会議に行くと言うと娘は、「お父さん、まだ、やってんの」と言います。「なんで、やるの？」と聞かれたことはありませんが、問われれば、「学童保育は、とても良いものだ」ということを一人でも多くの人に知ってもらいたいーということに尽きるのかもしれません。いずれは、この活動を次の世代の保護者に引き継いでいければと思います。

政府経済対策　指導員賃上げ対象に

政府は経済対策として、来年2月から保育士等の賃金を引き上げるとしています。12月8日に行われた国の子ども子育て会議の中で、放課後児童クラブ職員についても同様の措置を実施することが示されました。

わんこがっぱニュース

岩手県学童保育連絡協議会
〒020-0122
盛岡市みたけ3-38-20
岩手県青少年会館内
Tel・Fax　019-681-0651

分科会　世話人レポート

第1分科会

アタッチメントに課題のある児童の理解と援助

できることは何か考える

宮城学院女子大学教授の足立智昭先生に「アタッチメントに課題のある児童の理解と援助　～保護者に寄り添い、豊かな生活を～」をテーマにご講義いただき、119人と多くの方が受講しました。

アタッチメントとは、子どもから大人まで生涯を通じて存在するもので、恐れや不安の強い感情が生じた時に、特定の他者への近接を通して安全の感覚を回復しようとすることです。先生からはアタッチメントに課題のある子どもに見られる様々な特徴や、その対処方法などを具体的に教えていただきました。

アタッチメントがきちんと形成されることが子どもたちの健全な心の育みにつながるということを学びました。保護者とともに私たち指導員にできることは何か、を深く考える機会になりました。

また、指導員自身もセルフケアを心がけ、心身ともに健康に、子どもたちの支援にあたってほしいとの足立先生からのメッセージもうれしく心に残りました。

関畑　千春
（久慈市連協）

第3分科会

ほいく誌をひらけば

ほいく誌の魅力　再発見

第3分科会では、全国学童保育連絡協議会の大前朋子さんを助言者に招き、ほいく誌の編集にかかわるお話をして頂きました。

一冊のほいく誌ができるまで、約3カ月の編集期間、編集にかかわる人はおよそ100人。1974年の創刊から現在までの間にほいく誌編集に携わった岩手県の方は600人もいるとのこと。最初にほいく誌に掲載された岩手発信の記事は、盛岡市の子どもの作文（1975年）だったことや、編集部が大切にしていること、ほいく誌の魅力など今までの号を読み返したくなる貴重なお話を聞くことができました。

後半はほいく誌の活用について意見交流をしました。ほいく誌に投稿するイラストを募るボックスを設置している学童や、指導員の研修にほいく誌を利用している学童など、様々な意見があり、アンケートでも他学童の事例を取り入れたいという声が多くありました。

ふとした瞬間に、数ページ読むだけでも学びになる、学童保育の「今」が詰まった素敵な本だと思います。これからもほいく誌を生かしていきたいと改めて再認識しました。

永洞　麻衣
（盛岡市連協）

第4分科会

明日の子どもたちのために

保護者のかかわり大事

保護者OBで、県連協の千田広幸会長と酒井浩文副会長に保護者会の役割や魅力を語っていただいた。

【千田会長】学童保育がある学校を探してその学区に家を建てた。学童がなければ仕事を続けられなかった。自分が保護者会長になってからは子どもも、大人も楽しめる行事を考えた。忘年会では保護者も出し物をしたり、楽しい時間だった。自分が参加して楽しいと思える保護者会、学童保育にしていってほしい。

【酒井副会長】江釣子学童保育所のつくり運動に関わった。開所当時は子どもが少なく、指導員と保護者が家族のような感じだった。保護者会の役割は共通理解場。子どもたちのことを知りうる場。大事なことは保護者が足を向けること。指導員は保護者が足を向けられるように工夫してほしい。保護者が少しでもかかわることが大事だ。保護者の皆さんは、指導員さんと積極的に話をしてみてほしい。指導員さんは辞めないで続けてほしい。

◇　◇

少人数の分科会で、ほとんどの方に発言していただけた。保護者からは「コロナ禍でも、やはり保護者で集まる機会は大事。どうにかして集まりを持ちたい」との声もあった。保護者会があることは大事だと確認できる機会になった。

橋本　有紀
（盛岡市連協）